

大学改革と情報化社会の中の 大学図書館

土屋俊
(千葉大学附属図書館)

話題の予定

1. 社会の情報化の現段階:
「電子図書館」という無知と不幸
2. 日本の大学の将来:
今のわれわれが直面している「大学改革」とは何か
現状理解: 情報化はグローバル・大学改革はローカル
3. 情報化時代の大学改革における大学図書館
 1. 大学そのものの変化
 2. 社会情報化からの要求
 3. 大学における情報基盤の不可欠制
 4. 情報基盤構築における図書館の重要性
4. 最近の諸大学における事例の検討

昨今のいわゆる「大学改革」

- 主として国立大学がターゲット
 - 税金の無駄遣い論、特別会計の赤字、定員削減、大学全入時代、生涯学習化への対応
- 1990年代年の政策
 - 設置基準大綱化
 - 大学院重点化
- 90年代後半の展開
 - 点検・評価
 - 競争的環境
 - 教育の重視

大学改革の方向性

- 高等教育の状況

- アメリカ・(日本) 型 (50%)
12年度日本では大学40%、短大9%、専門学校20%
- イギリス・ドイツ型 (30%)
- フランス・ヨーロッパ型 (10%)
- 発展途上国型

- 日本の大学改革

- ドイツ型帝国大学方式
- 戦後の大学大衆化
- アメリカ型二重構造体制 (研究大学＋4年制学部大学) への移行？

先進国社会の不可避の情報化

- 「電子図書館」と「インターネット」のアナクロニズム

1993年 NII(通信と放送の融合)

1995年 GII

(日本で国会関西館構想、電子図書館建議)

1996年 日本でのインターネット爆発

1997年 インターネット社会へ (図書館はまだCDROM)

1999年 電子ジャーナル普及へ

- オープンなインターネットを社会情報基盤とする

- 社会の「神経」としての情報通信システム (電話、POSなど)

- モバイル化 (PDA、Iモードの展開、WAP規格など)

- 電子図書館としてのWWW

大学改革・情報化からの図書館へのデマンド

- 教育機関としての社会的役割
 - 学部レベル教育の教養化
 - 修士レベル教育の非学問化
 - ⇒学生から見て使える学習図書館
- 研究機関としての社会的役割
 - 先端研究の推進 (学術情報の円滑な流通)
 - そもそも「研究」概念の変質が予想される
 - 研究成果の移転の推進 (情報発信)
 - ⇒研究者から見て使える研究支援機能
(本はすでに消えている)

学習図書館構築不可能論

- 学生用図書の圧倒的不足
 - 国大図協の調査(1998年) 1人新刊書0.6冊
 - もう遅い、誰の責任か (図書館の責任ではない)、国民的不見識 (自民党文教部会報告)
- そもそも学生は本を読むのか、読ませることに意味があるのか
 - 「受験勉強が忙しくて、本を読む暇がない」
- 教員は本を読んでいるのか？
 - 何のための教育？研究よりも読書
 - 情報リテラシー教育の真の課題

生涯学習と大学図書館

- 地域の情報 (学術的)
- 図書館の開放、地域の異館種との分業
- 生涯学習こそが大学が生きる道
 - 半分以上が24歳以上になる日は近い(アメリカなみ)
- この目的から演繹される図書館の役割
 - 場所
 - 中身
 - Walk-in Useの正当化

図書館運営における教員の役割

- 図書館資料の収集への責任
 - 学習用: 教員として
 - 研究目的資料: 研究者として
 - 千葉大学の試み (資料予算の一本化、基本的外国雑誌、キャンパスグレイリテラチャの体系化)
- しかし、自覚は欠如している
 - 技術の進歩について知っているか (自分の研究方法でやっているかと盲信、「電子ジャーナル問題」で顕著)
 - 学生のために本を買うという自覚はあるか (研究室に本を置く意味は?)

電子図書館と図書館自動化

(建議という間違いは別にして)

- 「電子図書館とは何か」がわからなかった
 - 奈良先端の不見識
 - 目玉電子化方式
 - 二流論文収集方式
 - 標準化努力欠如
 - ⇒需要研究の欠如 (誰のため、何のため)
- やっと電子図書館の姿が見えてきた
 - アクセス(利用) : 学生向けと研究者向け
 - プリザベーション (保存) の二義性
- 図書館員のスキルの問題はもうない

情報化による 学術的コミュニケーションの変容？

基本的には1980年代インターネットによって
研究者が自分でコミュニケーションを制御
できるようになったはずだが、

⇒現実にはそうは展開していない

- 学術雑誌はどうなるか？電子ジャーナル化
- 学会はどうなるか？旅行は楽しい
- 授業で使う教科書はどうなるか？紙の教科書
はいつまで？
- 小部数専門出版はどうなるか？ひつじ書房

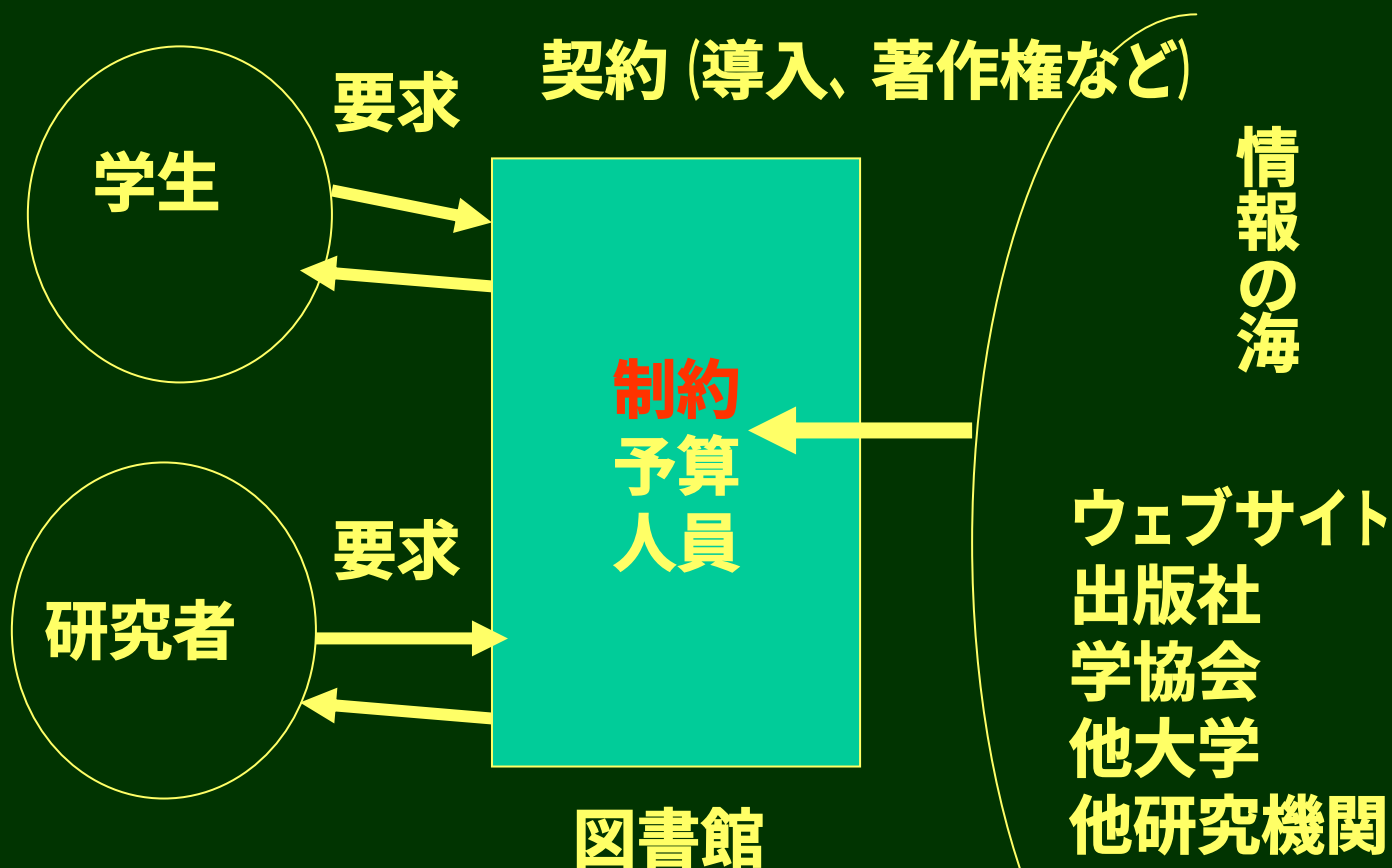
⇒これらすべてに教員はまったく無自覚

大学における大学図書館の役割の将来

- 学生に自分で勉強するように仕向ける (つまり、本を読ませる) のは図書館しかない
- 教員に世の中の情報化を思い知らせるのは図書館しかない
- 大学運営における情報基盤の重要性を自覚して、実際に構築するのは図書館しかない (ちなみに情報屋さんの出番はもう終わったかもしれない)
- キャンパスの中と外とを「契約」によって仲介するのが図書館 (発信も一応含めて)

ら)

ゲートウェイからインターフェイスへ

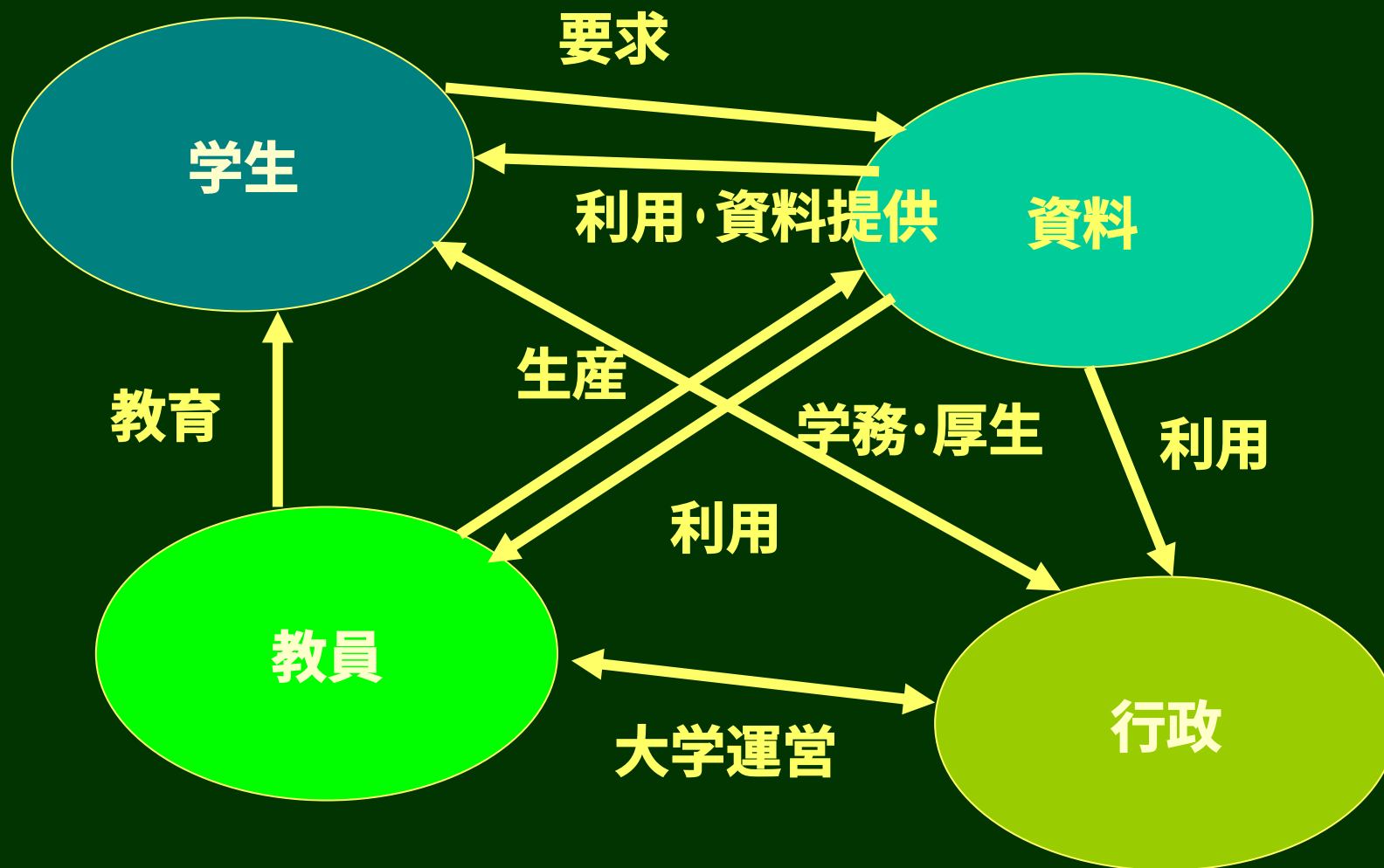


インターフェイスからアクセス・ファシリテータへ

21世紀のキャンパスでは情報基盤が本質的

- 多様な背景の学生が自分の条件に応じて、自分で学ぶ (パートタイム学生・進路変更学生の増加、いわゆる「学力低下」の本質化: 準備なき学生への教育の一般化)
- 対面教育と遠隔・時差教育の使い分け (教室の意味の再定義)
- 運営手法の効率化 (統一IDと共通データベースに基づく学生・教員管理、電子的コミュニケーションによる会議の削減、権限の分散化による即時対応、対外・学内文書交換の電子化など)

大学の情報基盤とは？



図書館員のイニシアティブを求めて

- サブジェクト・ライブラリアンは教員で代用 (ただし当面)。研究の直接支援はこれで十分
- 学生相手のリテラシー教育は積極担当
- 契約・業務管理 (外注)・学内連携が主要任務
- 図書館は、情報基盤のすべてにかかわり、図書館が大学の情報基盤を作るしかない
- それが、次世代の図書館像を規定する
- 図書館は、大学の目的と現状を理解して、大学の目的の実現を支援してほしい

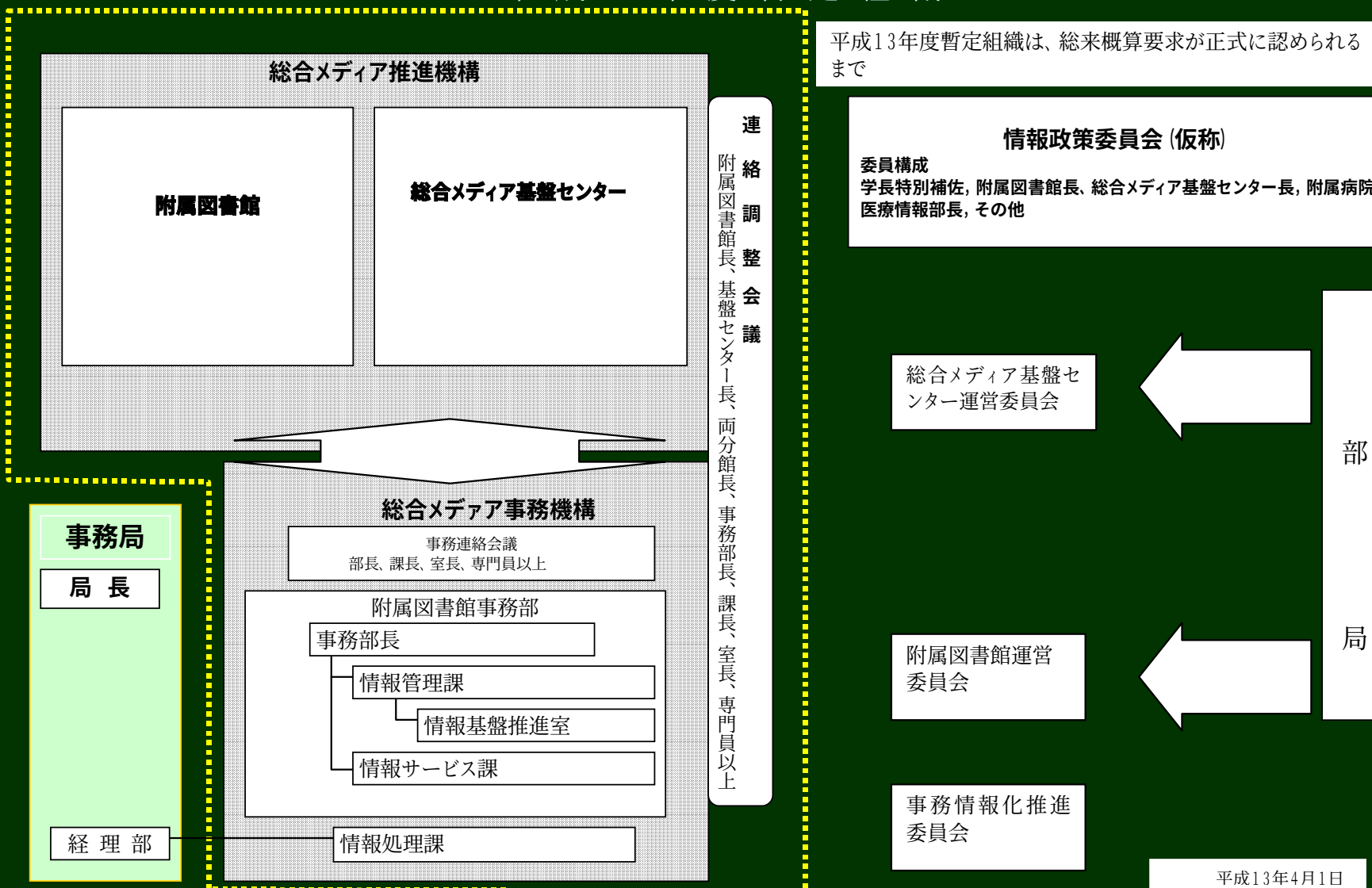
最近の事例

- 慶応義塾大学メディアセンター (1993年)
- 大阪市立大学総合学術情報センター (1996年)
- 早稲田大学メディアネットワークセンター (1996年)
- 立命館大学総合情報センター (1998年)
- 東京大学情報基盤センター (1999年)
- 九州大学情報基盤センター (2000年)
- 大阪大学サイバーメディアセンター (2000年)
- 東北大学シナジーセンター (2001年)
- 広島大学情報メディア教育研究センター (2001年)

－ ここは図書館無関係

千葉大学附属図書館

平成13年度暫定組織



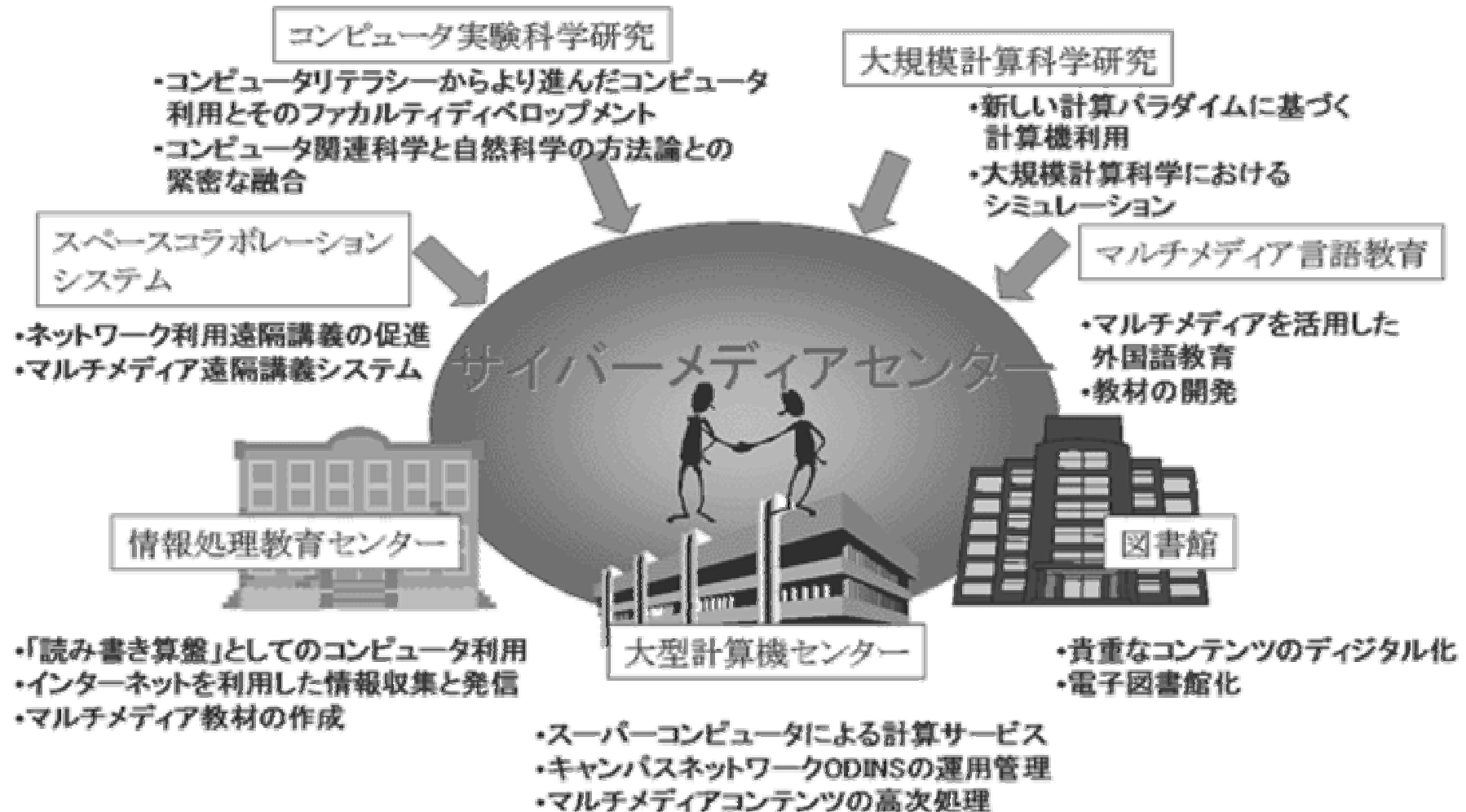
ネットサーフィンを試してみた感想

- **野合型**（男女が媒酌の人を介さないで同棲すること。正式に結婚の手続きを経ないで男女が通ずること。ひそかに結び交わること。）
 - 大阪大学サイバーメディアセンター
 - 東北大学シナジーセンター
 - 大阪市立大学情報総合センター
- **協議離婚型**
 - 慶応大学元メディアネット
 - 早稲田大学メディアネットワークセンター
- **計算機センター中心型**
 - 東京大学情報基盤センター
 - 九州大学情報基盤センター
- **キャンパス全体の情報基盤型**
 - 立命館大学情報総合センター
 - 千葉大学附属図書館（目下進行中ですが）

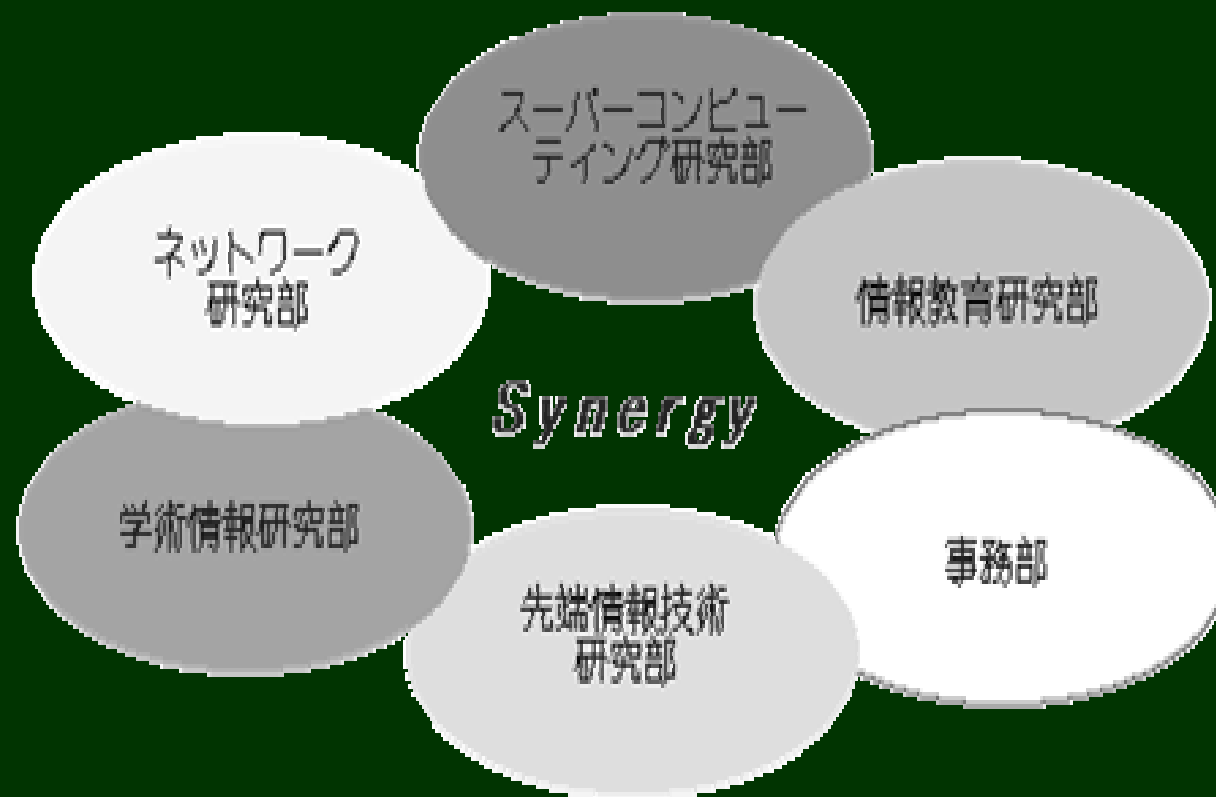
大阪大学サイバーメディアセンター (2000年)

情報処理技術基盤の格段の整備を図るとともに、デジタル・コンテンツの蓄積・発信のための基盤技術の提供および利用の高度な効率化

サイバーメディアセンターの概念図



東北大学シナジーセンター (2001年)



(まだ大型計算機センターのページが出てくる)

大阪市立大学学術情報総合センター

- 進展する高度情報化社会，地球規模に拡張する都市環境にあって，実学を礎とする大阪市立大学がめざす開かれた都市型総合大学の中枢機能を担うのが学術情報総合センター．日本有数の規模を誇る附属図書館と計算センターを統合した「図書と情報の館」であり，学内諸施設とネットワークするキャンパスLANを基軸に国内外の学術機関とインターネットで結ぶ創造性豊かな学習と研究の場でもある最先端情報拠点．さらにそれらを地球社会にも開放する．まさに拡張する「学宇宙」と呼ぶにふさわしいグローバルな学術・文化交流のアカデミーサテライト，21世紀を拓く「パーク・ユニバーシティ構想」の第一段階の実現です．

図書館情報 学部門

データベースを含む
メディアシステム部門

(部門のホーム
ページ)

コンピューティ ング部門

ネットワーク 部門

サポート

村上晴美

柴山 守

Venkatesh

Raghavan

藤川和利

松浦敏雄

石橋勇人

安倍広多

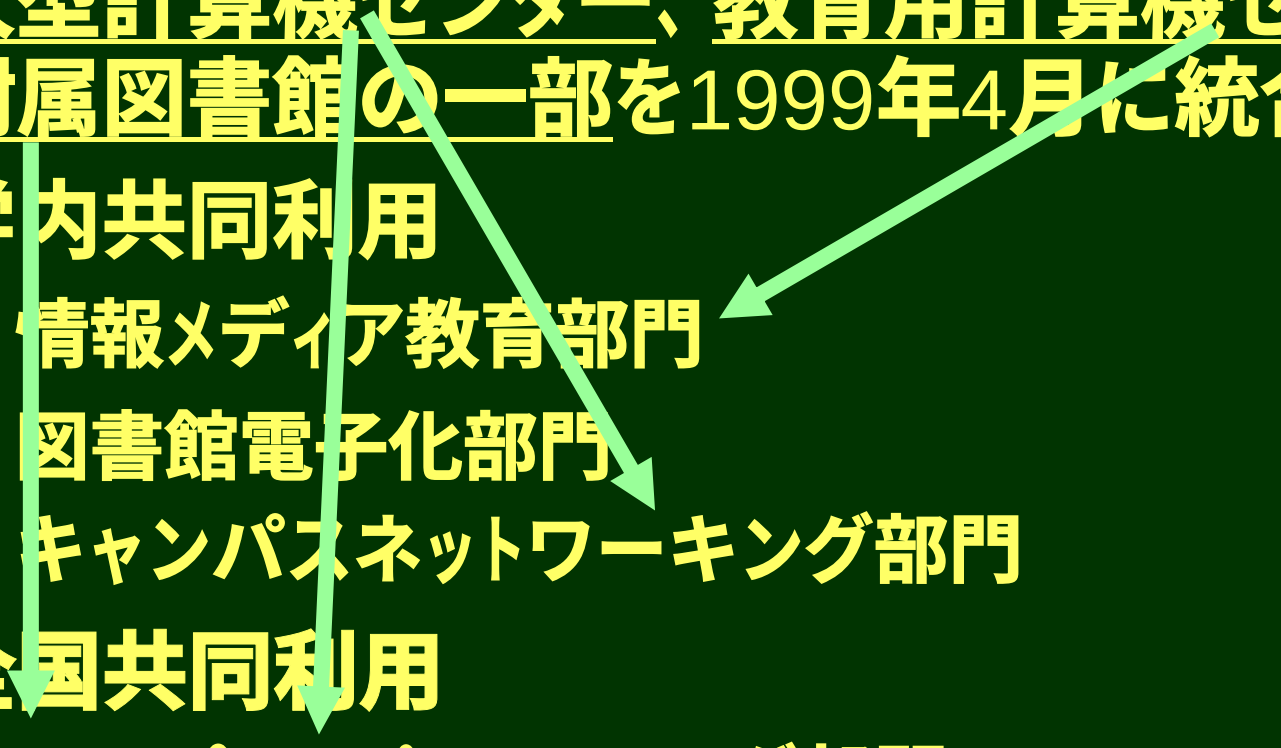
中野秀男

中山(下村)満
子

大西克実

井上志緒里

東京大学情報基盤センター (1999年)

- 大型計算機センター、教育用計算機センター、
附属図書館の一部を1999年4月に統合、発足
 - 学内共同利用
 - 情報メディア教育部門
 - 図書館電子化部門
 - キャンパスネットワークング部門
 - 全国共同利用
 - スーパーコンピューティング部門
- 

九州大学情報基盤センター (2000年)

- **情報教育支援**

情報教育のためのファカルティ・デベロプメント
デジタル教材作成支援

- **外国語教育支援**

自然言語処理の研究成果
タグ付きコーパス等の言語資源を活用

- **電子図書館機能強化**

電子図書資料の整備を担当し、センターはこのサービスの
ための情報機器の運用

- **学術情報発信**

大学に蓄えられた学術情報をデジタル情報化し、インターネット等により市民に向けて発信

慶應義塾大学のメディアセンター(MC)機能

- **図書館サービス**
 - メディアセンターの核は図書館サービスです。慶應義塾大学には5つキャンパスがあり、それぞれにメディアセンターを設置して、図書館サービス
- **各種資料やマルチメディアコンテンツへの対応**
- **情報収集と情報発信の支援**
- **インフォメーションテクノロジーセンター (ITC)は別**
 - 全塾の情報化に関する長期ビジョンの策定・実施、新規システムの研究・開発・試験、情報インフラの設置・管理・運用、教育・研究支援および研修
- **「メディアネット」による統合を経て、分離**

早稲田大学メディアネットワークセンター

1996年6月 情報科学研究教育センター（教育・研究部門のシステムを担当）と情報システムセンター（事務部門のシステム化および学内ネットワークを担当）を統合、さらに従来の図書館学術情報課（図書館のWINEシステムを担当）の機能をも合わせ持った新組織として設置。

2000年5月 ネットワーク型授業・学術研究データベース構築・マルチメディア教材作成など、教育研究のオープン化・教育研究スタイルの変革の具体化を目的情報化推進体制の再構築（情報化推進にかかわる企画調整・統括機能を教務部情報企画課に、運用統括・利用者支援機能をITセンター（Information Technology Center）にそれぞれ分離し、情報化にかかわる教育研究およびIRTの機能に特化した現在の形に再編）

立命館大学総合情報センター

- **1998年発足 (学術情報部門、情報システム部門を統合)**
 1. **学術情報に関するもの: 図書・雑誌所蔵情報、学会誌のデータベース化、電子ジャーナル、研究情報、研究者ディレクトリ等**
 2. **教育に関するもの: シラバス(講義概要)、教材データベース、学生向け配布物(テキストなど)**
 3. **学園広報に関するもの: 要覧、各種イベント情報、広報一般情報等**
 4. **事務情報に関するもの: 就職情報、学生情報、奨学金情報、会議録、課外活動情報、各種統計、スケジュール等**

情報処理センターの機能とは

- 「**計算機**」の運用 (借料と運営経費)
 - **ハードウェアの管理**
 - **ソフトウェアの運用**
 - **利用者の管理**
- **ネットワークの管理**
 - **学内の接続**
 - **対外接続**
- **情報処理教育**
 - **機器の管理 (UNIX, Windows, Mac)**
 - **授業の実施**
- **その他 (事務系業務、図書館業務など)**

サービスの性質

受益者負担とUniversal Service

- 図書館のサービスは「ユニバーサル」
 - 構成員のすべてが利用できる (不利な条件が不利にならないようにする。例：電電公社、国鉄)
 - 経費は組織が負担する
- 情報処理センターのサービスは受益者負担
 - 利用者が従量的に支払う
- しかし、変化が生じつつある
 - ネットワーク、パソコン環境の登場で情報処理センターのサービスがユニバーサル化
 - 電子資料等によって図書館サービスが従量化

組織の性質

- 図書館

- 事務組織として運用
- 所掌が安定的
- サービスと管理が分離
- 比較的大規模
- 大学内の位置づけが比較的高い(ように思われている)

- センター

- 教官と技官の組織である
- 一人何役ものの形態になっている
- 小規模
- 大学内の位置づけが低い

文化摩擦

(情報処理センター)

(図書館)

受益者負担対ユニバーサル・サービス

小人数対多人数

事務部なし対事務部あり

技術への信仰対技術への恐怖心・不信

プログラム対コンテンツ、リテラシー

データベース対オンラインジャーナル

教官カルチャー対事務官カルチャー

研究対サービス

PCユーザを知らない対知っている